

東方朔

正字

表

賈茂物

張良

九

東方朔

早連
面一紙や四時うり座まぐして雲

こ夏くれ今へもや秋乃ち百七

乃星の姿を急くあり帝乃御

殿さる殿早連ふあう花の袖さる

七宝乃皇金銀乃座早連み君さる

官軍さる早連あさ居る

素遊とありて安き世に安く樂に
ぬそのあまの音よあま見城も
まはいうと清く撫さる只是君乃御
威光の廣き惠をさるるや
治まらる代乃安き世に安く
成迄も安き世に安く惠を廣き
汝君の影を頼む計なり 又賢王

乃代の安き世に安く
うねほ安き世に安く
時よ安き世に安く
しまの安き世に安く
秋の安き世に安く
音の安き世に安く
るひく稲の安き世に安く

早連

めくれく ^{ニテ} いふ奏す戸へ事ぬ

此國の傍は住者うゝぐと度子細皆

早連

て其内にてい ^{早連} けくハ此方へあり

是のい玉の傍は住者ありと目出度瑞

相の思ひにてしきうてハ此程多くの者

鳥津殿の上を飛回つといはせ西王母の寵

改
糸
礼

受の鳥うゝ則西王母此君へ来れ

へい事奏すやん為子参りて

早

かる目出なる社人。おと仙の御態お

お語久 ^早 それ仙歸とら所も人同ま

は松の枝をすれ苔とやみそく年

は短きやを樂こつさひ死の自在

乃通と得る ^早 天歩くも悲みたる子ハ仙

人よりくはくは採集の年
を理て終り成道しつゝて大聖
なるもの給ふとてあつた仙人の
まにまに中の中を西王母
と図えし西方極樂世界壽仙
乃に現るれ然るに命れ仙人
と成る目せしは色を蘭けり

桃の三千年一度花咲くは
才乃仙薬と成るを思ふは
今多つたれは名をさす
陽まゝあつた方朔の國に
あり事ありまゝ桃を食ふ
所壽命長きなり身も長
し意に王母と傳ふを
素門申し

と庭上を登つてゆるいねに等しく
ゆるつて形を空に入らまうく
抑是ハ仙知いづと年久し
東方朔といふ事なるを梅を我
西王母の抱えとて腹より出ぬ
壽命改ふ九千歳といふに梅抱
と君おはけやえんものちひあり

上丸
いふやめやふ西王母ぞくしあ
内申つて魚候や西の空より
く白雲一むら降るとかきう
是乃青鳥翅とあらうて死回
姿を妙さるる母の出立きもや
く衣冠を脱ぎしけりや葉
て頭を給ふまゝなりなる奇物

口半河

正尊

是より西塔乃武藏坊辨慶より
伏し我君判官殿へ銀金殿より
大名十人付りさきひに内より
不和の故なりより心を合さる
一人宛悉くアとさるひに伏し去
年乃正月は曾義仲を返討せり

うと以家^{ユノカ}廢て子家と貴落一此
去亡ほ一果ては一天^{サカ}神め四海とと
まひ勸賞をさちるおへき殿よ後
過るく槐^{サカ}思の道^{サカ}櫓の異見と家
引去るさく遺恨より我を
と還奏^{サカ}御兄等表の中不和よ
成る日てはよう後より出依^{サカ}正^{サカ}な

や申去。明日都へ上ては果てはわう
君と祈ひ申さむ為と変る事急
る連とまれとの御後とての祈よ
ひと出依^{サカ}様宿へといふは依へて
業の判官殿より御はまひさう
しあさく正なる此を乃内よ入る
武藏殿やあさくやがえは方へ^{サカ}

入へ^甲 承^レ任^ルき^ハ御^上り^目出^ル
う^ハ任^ス是^ハ君^上り^ハ任^スは^スる^ハい^ハ上^ル任^ス
乃^ハう^ハさ^ハる^ハ及^テれ^ハ行^クさ^ハる^ハい^ハ上^ル任^ス
も^ハぬ^ハる^ハ銀^金殿^上の^ハ意^ハも^ハ聞^クる^ハ事^ハに^ハ座^ス
任^ス回^ルい^ハる^ハて^ハ御^上り^ハあ^ハれ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
ま^ハる^ハい^ハ上^ル任^ス宿^ルお^ハる^ハ子^ハ細^クい^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
熊^野に^ハあ^ハる^ハ乃^ハ為^スる^ハ不^圖お^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス

昨日^ハ京^上美^上仕^人に^ハ路^決り^ハ遠^倒仕^り
散^ルる^ハさ^ハる^ハい^ハ上^ル任^ス今^ハさ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
上^ルい^ハ上^ル任^ス細^承の^ハ作^らる^ハ事^ハに^ハ座^ス
も^ハ今^ハ御^上任^スも^ハさ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
長^クい^ハ上^ル任^スも^ハさ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
任^スも^ハさ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス
う^ハ時^ハも^ハ早^ク任^ス乃^ハ任^スも^ハさ^ハる^ハ事^ハに^ハ座^ス

といふ事ありきまゝに
 ありまゝにありきまゝに
 給ふまゝにありきまゝに
 まゝにありきまゝに
 宿願なるれは向熊野にありきまゝに
 ありきまゝにありきまゝに
 経と銀金へも入るべきと道よりあり

かえりきし事いふは 具事ハ
 ありきまゝにありきまゝに

^上あゝこれ起き起きまゝに
 唯今御目よりありきまゝに
 席をありきまゝに
 者より自筆にありきまゝに
 ありきまゝにありきまゝに
 敬つて申起請

文乃るすべし梵天帝釈摩訶王焰魔
法王五道乃冥官泰山府君下界此
地より伊勢天照太神を祀りて伊豆
箱根富士河内熊野二所へ金峯山
王城乃鎮守稻荷祇園久遠貴船八
幡三所松乃尾ひれ妙く日本此
大小名神祇冥道諸一證りて此に

いふにち氏れ神令々正存討まふに
ちねりあき地の偽り見あへん此に
言れ御罰外なりなり家世に阿鼻に
墮罪おろしきしをたふし仍て起請
文にこれなり文治元年九月日正
存と讀上たるなりれもよりなりて
なりきなりなり家虚言といふ思ふ文と

振袖くつたる器用を感へたまへ
 マヅナは下りて折れぬ水
 前子儀乃お同うむとめよ輝とるお
 白拍子ふやうもさいつた生あつた
 まぐらうがれ姿そたくひささ
 舞乃袖君の代々世うとうい
 がれ塵れ^上_{お上}土う雲うれ山をちれ

まゝく山と成まて
かきうぬ
契りも頼む中れく
おぼろしく申さる
いふれ去匠坊前を
えん寝所よりき
出申なり
宿所を見きたつても
寂し幕

乃には矢を射けり残さるる皆
武具とて置かうたる親交を
て文の物納りきりたるなり
仍^判ひもその語れ前なる事
まゝの事なりきりと
やうく^上御座を立^下おのゝ背にあり
す^上義経是とあられり
口キカレ

御もせんとて立ちくも中
廊より出らるるをひきりかき
うかきおれをゆき^下く^下上
浪とてあやむ^下つ^下れ^下る^下こ
ころあり^下ゆ^下を^下時^下正^下る^下駒
あつくと打ちやうとて名
家や^上ね^上は^上る^上鑑^上金^上殿^上の^上御^上は^上出^上れ

正尊と申す也九郎大判官殿
 乃討平太將兵と申すやうに
 腋をさうと大さうとさうに
 味方機は是と云ふやうに
 坊と討と申す我と申す中
 には田原熊井太郎毎慶と云ふ
 やうに申すやうに申すやうに

乃共海りりひおめこりきして就
 乃り其時毎慶と云ふす
 乃て佐佐木と申す梅も云ふやうに
 起請乃得と云ふも此あるやう
 乃て一太刀と云ふやうに大將と
 乃て申すやうに乃て打おひつ
 乃て申すやうに乃て申すやうに

山崎路也。関のなる。白川也。都
より。多き。まう。く。是。い。や。お
よ。付。く。い。家。と。は。二。条。京。極。平。河
の。舊。跡。と。や。し。申。ん。ず。事。の。思。ひ
出。ら。れ。て。し。親。や。る。者。多。く。保。氏。如。緒
と。う。ち。も。は。ら。ふ。ひ。亡。父。の。情。を。と
文。よ。お。と。衣。成。折。る。水。う。つ。蟬。若。き。を

う。め。う。ま。う。ま。れ。も。う。よ。お。人。う。の。ま。う
一。き。う。那。が。極。よ。録。き。も。此。可。き
の。事。や。う。う。う。哀。な。う。古。跡。や。お
お。く。お。宿。し。あ。う。せ。作。ら。ん。染。め。庵。の
う。き。く。や。も。し。う。あ。の。乱。き。あ。れ。い
折。も。ゆ。う。ぬ。う。う。の。内。吊。ぬ。あ。う。も
ま。う。跡。と。ま。う。は。う。う。う。う。ま。う。い

ニテ
女
符

ぐうの城まの庵のうらよ思ひ寄る

心コれコらコやコ見ミいたタ行ユとトあハはハみ

お借とつしうさ作サ家カよヨおオねネよヨおオをヲ

鈴スズよりヨリ身ミのノ借カづヅるル人ヒトうウらラあアうウ

住シやヤ何ナニとトるル何ナニとトるル家カをヲあハりリをヲ

ゆユうウあア跡アト乃ハ其ソノ甲カウのノ創ソウるルあアれレ

我ワもモ昔コトのノとトるルうウとトるル思オモひヒをヲあハりリをヲ

出デたタるルあアれレあアらラうウもモあアらラうウ

てテうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

あアらラうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

なナらラうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

何ナニのノあアらラうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

其ソノあアらラうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

あアらラうウあアらラうウあアらラうウあアらラうウ

二二二、一 元一 下七 二二 下
シテ同

シテ

口
丰

口
丰

シテ

エテ

七

廿九

手

75

レテ

元



下

0

7

夜乃^ニあ^ニい^ニてはあ^ニとあ^ニと^ニ入^ニ
い^ニま^ニき^ニく^ニ ^{上あ^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、}
外子^ニ極^ニ寝^ニく^ニ ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、}
蟬^ニの^ニ跡^ニや^ニ法^ニの^ニ様^ニと^ニま^ニあ^ニゆ^ニ縁^ニ
い^ニち^ニ寝^ニや^ニく^ニ ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、}
獲^ニれ^ニゆ^ニあ^ニ事^ニや^ニあ^ニね^ニあ^ニね^ニ
い^ニち^ニあ^ニれ^ニう^ニと^ニと^ニは^ニげ^ニと^ニか^ニま^ニら^ニ

い^ニち^ニや^ニ ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、}
あ^ニは^ニ二^ニ人^ニあ^ニれ^ニ給^ニい^ニあ^ニあ^ニ人^ニう^ニ
い^ニち^ニと^ニ忘^ニま^ニる^ニも^ニ宿^ニま^ニる^ニも^ニ

い^ニち^ニ乃^ニ入^ニる^ニ我^ニも^ニう^ニれ^ニよ^ニを^ニ蟬^ニ若^ニ
い^ニち^ニ残^ニほ^ニと^ニな^ニる^ニ新^ニの^ニ疾^ニの^ニほ^ニう^ニ
い^ニち^ニい^ニち^ニや^ニ ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、} ^{下^ニキ^ニ、}
何^ニ若^ニ思^ニう^ニあ^ニれ^ニ月^ニれ^ニあ^ニは^ニ若^ニう^ニ

て恨をもちてはるゝ
 空を僧乃
 御あつて懺悔の姿を
 上
 終るにあつてはるゝ
 濱の美砂乃石たぐあふもさるゝ
 清ようもさるゝ
 かの風情を
 二子とさるゝ
 音よはるゝ

つらむはるゝ
 ちるゝ
 公若白馬の夜昼れ
 多う目と二百六十目
 一年の日のね
 あつてはるゝ
 二百の後方十九
 道方ある時

四面をかつまれ一きをもある時ハ
歎を責つてききあつてききあ
うむ乃ちぬれ衣をうゑても寝ま
やれぬ故枕字なり亀れをうつ
一目切なりとあつてつゝあつて
生れぬ二老河を流るその中よ白道
とつていふもいふもや今うら

障二後乃ち女のまはれぬ
かきこゑとていふやうな
ゆゑに春や繪合の勝負はな
いふをばすも竹川のつゝあるを相壺
常すれまゝの勝負はあつたる
雨乃ちあつてあつていふやうな
又教へ宿よきをうてはたうれぬ

もやゝめさ半部をあらと
や平子ゆえに 引まき筋を
尋むるふ長よいかまよ
上^上 石多白る反髪正乃大將のちま死
なをうたつて 燠胸のゆ
火取乃灰とうらうきれいやは急
忠二道^忠梅^梅うえ紅梅美をいふも

うりもわさうあるがを宇治山屋宿
きつるひてききとふよくえ一手
二手^二へんくいさや目撃まじり又一手
おもくうさう七打八うら九うら十市
乃里れ其の勝負碁よりせく打つよ

上壽、
妙法蓮華經

二
行

むらゝるゝ所物語久^テ 是の思も
 うゑを^テ 勢も^テ 始り^テ 洗
 神の初^テ 日毎にあり
 是の意を^テ 初るに
 あつた^テ 初の^テ 日
 是の社^テ 奇^テ 成^テ あり
 うね^テ 社^テ 名^テ 明^テ 神^テ とも^テ 狂

原中將業平の所^テ ありや^テ 也
 今夜^テ 我^テ 新^テ 子^テ 霊^テ 多^テ 有^テ 此^テ 程
 母^テ あり^テ 今^テ 目^テ あり^テ 未^テ 同^テ 家
 所^テ 示^テ 現^テ あり^テ 作^テ あり^テ 来^テ 始
 あり^テ 事^テ あり^テ 是^テ 所^テ 終^テ 入
 是^テ 所^テ あり^テ 終^テ 上^テ 事^テ あり^テ
 空^テ 所^テ 終^テ あり^テ 終^テ あり^テ

まぐく古なまひるに
そ科方さくらに花の都る海山の
それ隔ふも思ふ心れ道が邊の便り
の極夏もく寝あみかきあふ
おのれれおふけなりく
まの卯月のさうくはふ早板を非
山乃あひまふさくぬむやとあふ

まめさうく人あふめらまても
あふまけけうふの夢や露れま
はる苗もなる
まはの色もくも思ひ有牙と
やうんサ上サ上さるや花の都れまて
びる時の物もたふさく
非の桜の紅の道まふくあふ

ぬき乃様くみて袖をけし
 すそをけし行ふ人の道ありあへ
 然るおまふ神乃我れぬそ
 乃うゑん^言ちの心は我れぬく
 ひやまればさる山陰のさる乃の
 乃の森のさるも夏木立涼き
 父いれられや^男まじや^女夢をさる

乃の野へ乃の
 面影自は乃の
 替るぬき^男乃の

人々六當社の所神なり
 有く能くやむる者や
 是ハ行ふも
 思ふも

めいしきやうちきりや方便の所
 雲ふりりれ和室の影は相云綺羅
 虎勢のれはちや上男
 知り取うや讃佛堂の心ちうな
 おもひろもむろのちう。志うも是
 成河社の南社もあつてもさめろ所
 事跡奇と手向と古き心と

叶へたまへー シテ ち社へあそ

事奇と細受ちうすれと所謂何

事 男 是とちと實方れ算

経月振ひの候時の舞乃きと

神にさうかたけり影の水にうり

所手流乃ぞのえに有世外流る橋な

乃文井ととや シテ 是有種やと

男

彼^男子^男 待^テた^テき^テる^テく 影^{カゲ}と^トみ^ミる^ル
 青^{アヲ}い^イち^チや^ヤう^ウに^ニあ^アる^ル面^{オモテ}貌^{カミ}の^ノく^クだ^ダ
 ち^チへ^ヘ果^ハる^ル粧^{シヨウ}白^{ハク}い^イふ^フ音^ネれ^レる^ルの^ノこ^コ
 花^{ハナ}に^ニも^モか^カほ^ホを^ヲめ^メの^ノめ^メり^リの^ノ落^{オチ}ち^チ
 こ^コを^ヲ出^デて^テ今^{イマ}の^ノ逢^{アイ}を^ヲ中^{ナカ}く^クふ^フま^マた^タい^イや^ヤ
 ち^チに^ニ露^ロの^ノ命^{イデ}を^ヲ恨^{イラ}み^ミ今^{イマ}を^ヲ恨^{イラ}み^ミ
 つ^ツに^ニお^オ人^{ヒト}公^{キョウ}社^{シャ}と^ト舞^{マユ}を^ヲま^マい^イに^ニお^オる^ル

い^イふ^フ力^{リキ}を^ヲ新^{アタラ}し^シに^ニあ^アる^ル神^{カミ}と^トや^ヤ幼^コ女^メあ^アる^ル
 き^キと^ト風^{フウ}折^セ烏^カ帽^{ボウ}お^オか^カり^リふ^フき^キて^テ男^男の^ノ向^{ムカ}
 の^ノ舞^{マユ}と^トま^マい^イに^ニあ^アる^ルや^ヤも^モい^イふ^フさ^サと^ト
 夏^{ナツ}衣^イく^ク花^{ハナ}の^ノ袖^{スベ}を^ヲや^ヤめ^メる^ルや^ヤ海^{ウミ}
 あ^アい^イに^ニま^マい^イに^ニあ^アる^ル衣^イの^ノ交^{カウ}を^ヲと^ト神^{カミ}と^トみ^ミる^ル
 や^ヤ移^ヒり^リ舞^{マユ}ま^マい^イに^ニあ^アる^ルと^ト打^{ウチ}鼓^コの^ノ音^ネは^ハ
 法^{ホウ}性^{ショウ}を^ヲお^オの^ノ色^{イロ}を^ヲあ^アる^ル風^{フウ}く^クと^トま^マい^イに^ニあ^アる^ル奇^キ

乃聲ハナ氣キ象ゾウ明メイの鏡カミタマようつゝ 宇ウるル若ニギハヤヒ
 年トシにニ初ハジメもモ方カタのノ馬ウマ車クルマとトあアるルをヲ
 よヨアア疾ハヤ疾ハヤ乃ノのノ浪ナミ立タぬヌりリまマさサくク行ユクまマのノちチ
 うウいイをヲねネむム逢オホ瀬セ乃ノ末マタ憐レナらラぬヌ玉タマ塵チリ
 がガのノ亂ラン交カウをヲ守モリ終ハヤシへヘ神カミをヲ志シてテ
 ふフ漲シタガハシるルまマにニきキづヅみミくクなナりリあアりリ
 まマくク洞ツツミちチうウふフ立タ初ハジメくク都ミヤコもモ心ココロにニあアるル

東トウ路ロれレはハ遠トホくクあアるルはハ名ナをヲあアるル出デ
 心ココロ思オモひヒ乱ランきキつツあアるルはハ作サセりリしシつツたタ
 こコがガたタしシとトすスぬヌ人ヒトのノ都ミヤコれレ長ナガ路ロよヨ
 おオらラぬヌまマさサくク尋ヒツねネのノかカひヒをヲあアくク共トモ
 けケのノみミあアるル程ほどをヲあアるル東トウあアるル冬フユ
 けケうウらラるル八ヤチ橋ハシのノ端はたにニあアるル思オモひヒをヲ
 つツくクをヲあアるルはハあアるルはハあアるルはハあアるルはハあアるル

うけりおる中平く命せうら白
雲乃又越つとむひまや
藤枝の芽まうもく自命し別り旅
れまふとく河内郡の宿とるや
細道がさくぎなき衣さう乃山現
やまに成りし見せよけくうは黒白
けうりまぬのさくくふゆりさる都路

乃雲井の文やまの目えり影り入の
柳りさくさく見まき錦さくすた
てめさの霞乃衣れはやくたまふ袖も
梅りまのたやめり春さく夏もも
やみさくさくたれ都へりふ袖のまに
貴賊群集の粧目もさくは夜あり
月につく月ふさく花を瘰め

高
 煮
 成
 て
 乃

張良

罕句

是ハ漢高祖乃陛下張良とハ神也
されハ程ハ陸軍に力あるれハ或夜
きのまのやうに是より下邳と云所
へ土橋ありは土橋は行ともくや
ともう一人をたね馬よりい
逢成者乃智と落し果て

古
いひて

古
んふと

せうと云げたるを我より
 かくしと思つきたるを我より
 只のちの共とたたるを貴い親
 となし習ひたるをせて依ぞれ
 時は者へ候は減の志ありじ日
 うり五日^カの節に日るにあり其法
 のちを傳はしきう申へるふ

めぬちうくは候へるも今日^カに
 相当に候程より今下郎^ノ出橋と
 急^ウ作^リ立^リ上^リ乃^ハ天^ノの^ノゆき^ノを^ノく
 ばやとさうと行^ハはとま^ハ道^ノは^ハおれ
 山^ノも^ハち^ハう^ハ渡^ハさ^ハう^ハ山^ノ下^ノ郎^ノ
 れ^ハ出^ハ橋^ハの^ハち^ハう^ハく^ハ荒^ハと^ハそ
 か^ハう^ハり^ハや^ハい^ハつ^ハ張^ハ良^ハ年^ハた^ハる^ハの^ハと

契りせしむるもいふはなれどまた

うのわがわがをわがをわがをわがを

曉鐘とわがをわがをわがをわがを

をわがをわがをわがをわがをわがを

をわがをわがをわがをわがをわがを

うり五日よふしそれ日あつて我

らぬ我しよふしそれ日あつて我

わがわがをわがをわがをわがをわがを

わがわがをわがをわがをわがをわがを

にせよきりくわがをわがをわがを

わがわがをわがをわがをわがをわがを

わがわがをわがをわがをわがをわがを

わがわがをわがをわがをわがをわがを

たきしるふとわがをわがをわがを

古
く
又
の

地七
北

あさ深更みく山乃くひるは夜を
も前ち下跡ぬり吸やるを梅よ
とく霜乃白きけり身はぬるま
渡りし人の跡をわが
そもや思ひぬるも
てもふかき夜馬の鞭うつ人影の馬
とちやむるあまふあは
後上
作是ハ

黄石より登入ありハナハナ家に漢高

祖の片下張良と云々ハナハナ程所

見く君臣とたゞし義と金と

去てくろたき上質人ハナハナの器

量胸上を治めハナハナ民とあり

心上の天道ハナハナ通して忽ハナハナ

法上の威應ハナハナまねありハナハナ大事

を傳へて上但ハナハナ人ハナハナの事

らけ味方とハナハナか天下と治めハナハナ

る事とハナハナば侍つてハナハナ効をわく

ありハナハナと張良ハナハナの言ハナハナ

替ハナハナる公ハナハナの病ハナハナの眼ハナハナ

とありハナハナとハナハナいハナハナ安ハナハナもハナハナやハナハナ威ハナハナ

不ハナハナ思ハナハナくハナハナ梅ハナハナのハナハナかハナハナありハナハナ

舟よりいへ張良づきめをやく
 多うゆめむしめたるものさしに耐
 張良立ちあがり衣冠正しく川に
 去橋を渡りしよりゆき反天晴雲
 量の人新うおと思ひなりしを
 心はしむと石云ハまのふれを
 馬上よりつゞきおれりみせし
 上意
 上青
 上青
 上青

舟より張良はしむと石云ハまのふれを
 心はしむと石云ハまのふれを
 馬上よりつゞきおれりみせし
 上意
 上青
 上青
 上青

再読さしちり心へたためし
大地の雲井の樊々し石とる
高山ありあがり色しとる
空よりぞきとる姿と黄と
わづらびとる

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也

寛政十一巳未歲弥生

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二條通御幸町西入町

山本長兵衛



